

ASD者の強みを活かしたグループセラピーの展開の工夫：「クライアント企画」を通して他者意識を形成した男子高校生の事例

古長，治基
九州大学大学院人間環境学府

下池，洸史朗
社会福祉法人玄洋会糟屋子ども発達センター

古賀，聡
九州大学大学院人間環境学研究院

遠矢，浩一
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/2202933>

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 9, pp.91-101, 2018-03-22. 九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センター
バージョン：
権利関係：

ASD者の強みを活かしたグループセラピーの展開の工夫 —「クライアント企画」を通して他者意識を形成した男子高校生の事例—

古長治基 九州大学大学院人間環境学府 / 下池洸史朗 社会福祉法人玄洋会糟屋子ども発達センター
古賀 聡 九州大学大学院人間環境学研究院 / 遠矢浩一 九州大学大学院人間環境学研究院

要約

本研究では、自閉スペクトラム症（ASD）の傾向を有する男子高校生に対する、2年間のグループセラピーの展開について報告する。対象となる男子高校生は、ASD者に特有の対人コミュニケーションの問題をもち、学校生活においては、他者と友人関係を築くことができずにいた。また、グループの中でも、好きな活動に没頭するあまり、他者への意識が向きづらくなる様子が見られた。グループセラピーでは、クライアント自らがプログラムを考案する「クライアント企画」を行い、彼の好きな活動に対するこだわりを積極的に活用した。プログラムを考案する過程で、彼はメンバーが楽しむためにどのような工夫が必要になるかを担当セラピストおよびリーダーと話し合った。話し合いの中で、彼は、自身が楽しむだけでなく、メンバーそれぞれが楽しむことが出来るようにプログラムを見直し、企画の内容を調整することが出来た。ASD者の対象へのこだわりを強みとして捉え、こだわり対象を積極的に活用することで、ASD者の他者意識の形成を促すことが可能になると考えられた。

キーワード：グループセラピー 強みの活用 クライアント企画

I 問題と目的

複雑な対人関係を経験し始める青年期にとって、対人コミュニケーションの問題は重要である。対人コミュニケーションを課題とする自閉スペクトラム症者（以下ASD者）にとっては、適切に対人関係を築いていくことの問題は、一層大きなものとなる。西田（2014）は、高機能のASD者について、「思春期・青年期における対人関係上の躓きは、種々の二次的な適応上の課題となって現れることがある」と述べている。また、滝吉・田中（2011）の研究では、思春期・青年期のASD者は、「他者との相互的な関係性の中で自己を理解する場合、自分自身のできなさや困難さを認識しやすく、自己を否定的にとらえる」傾向があると報告されている。以上のように、ASD者にとって、青年期はその後の適応に大きく関わる時期であり、この時期に他者との適切なコミュニケーションを体験することは重要である。

コミュニケーションに焦点を当てる方法の一つに、グループセラピーが挙げられる。遠矢（2006）は、グループセラピーの意義の中に、「友人関係形成の場」と「相互性の体験」を挙げている。このように、集団での活動を行う中で、同年代他児との交流を深め、日常では体験しづらい、安心感のある相互的なコミュニケーションを体験することが可能になる。青年期を対象としたグループセラピーの報告実践は少なく、その背景には、児童期の集団のネガティブな体験、発達障害の特性によって集団を好まないことなどが理由として挙げられる（廣澤，2016）。しかし、日常ではネガティブに体験されやすいからこそ、セラピーの枠組みの中で、集団に対して回避的にならず、同年齢他者との相互的交流を図ることには大きな意義がある。従って、青年期の発達障害者に対するグループセラピーについては、今後、実践報告を始めとする知見を積み重ねていく必要がある。

別府 (2010) は、高等学校での高機能自閉症のある生徒についての支援のポイントの一つに、「得意」の発見を挙げている。そして、「得意」を発揮できるような活躍の場面を作ることの重要性を指摘している。別府が指摘するように、発達障害児・者の支援を行うにあたっては、彼らの強みを活かした支援が重要である。発達に偏りのある児童の強みに着目した支援としては、近年2E (Twice Exceptional) 教育やGT (Gifted and Talented) 教育などが注目されている。これらはアメリカで1980年代以降に広がってきた実践であり、発達障害生徒の才能を識別し、伸ばして活かそうとする試みである (松村, 2016)。海外では、こうした特性を持つ人達をいかに識別するかなどが議論されており (例えば, McCoach, Kehle, Bray & Siegle, 2001), 才能を活かす教育について制度を整えつつある。日本でも、最近になって教育行政レベルで語られるようになってきた (松村, 2016) しかし、これらは教育実践的な意味合いが強く、心理学的視点から強みを捉えるアプローチとは異なる。ASD者の強みが、ASD者自身の心理的側面に及ぼす影響については十分明らかになっておらず、さらに検討が必要である。

ASD者の強みとして挙げられるのが、「こだわり」についてである。ASD者のこだわりとは、一般にDSM-5 (2013) の診断基準で用いられる「行動、興味、または活動の限定された反復的な様式」American Psychiatric Association. (2013, 2014) を指しており、複数の意味合いを持つ概念であるが、ここでは特に、限局された興味・関心と称されるこだわりについて述べる。滝吉・田中 (2011) は思春期・青年期のASD者を対象とした調査の中で、「こだわりなどの興味関心を積極的に活用すること」が、社会への適応を広げ、他者との関係を築くきっかけとなると述べている。すなわち、彼らが日頃好奇心を持ち続け、夢中になっているような対象を活用することで、彼らが苦手とする対人関係にアプローチすることが可能

になる。以上のことを踏まえると、青年期を対象とするグループセラピーにおいても、彼らのこだわりを強みとして捉え、活用するという発想を取り入れていくことは重要である。ASD者のこだわりを活用する手法の一つとして、筆者らは、グループセラピーに「クライアント企画」を取り入れることを試みた。「クライアント企画」とは、セラピーに参加しているメンバー自らがプログラムを企画し、担当セラピストやリーダーと話し合いつつ、企画をまとめ、実際にグループの中で実行するという方法である。本研究では、グループセラピーに参加した男子高校生1人の2年間のセラピーの経過と「クライアント企画」の展開について報告し、強みを活かしつつASD者の他者意識を育むための工夫について論じる。その上で、ASD者のこだわりを活用することの有効性と、グループセラピーに「クライアント企画」を取り入れる意義について事例的視点から明らかにすることを目的とする。

II グループの概要

1. グループセラピーの目的

セラピー全体の目標として「同年齢他者との間で相互交流を行うなかで、メンバーそれぞれが対人コミュニケーションに自信をもてるよう促すこと、および、安心感をもち居場所として感じられる場を提供すること」を年度開始時にグループセラピストに説明した。

2. メンバー

X年度は、発達障害の診断または傾向を有する男子高校生6名。診断はX+1年度も、男児6人で同様のメンバーであった。高校は全日制高校、通信制高校、定時制高校のいずれかに通学していた。ほとんどが他者とのコミュニケーションの問題を主訴に来談し、グループへの参加に至っていた。学年および診断についてTable 1に示す。

3. スタッフ

臨床心理学を専攻する大学院生。グループリー

Table 1. グループセラピー参加メンバーの概要

氏名	学年(X年→X+1年)	診断名
A	高2→高3	アスペルガー障害
B	高2→高3	ADHD 疑い, アスペルガー障害疑い
C	高2→高3	高機能広汎性発達障害
D	高1→高2	自閉症スペクトラム障害, 適応障害
E	高2→高3	書字障害疑い
F	高1→高2	広汎性発達障害 (自閉症)

ダー 2 名, 親の会グループセラピスト 2 名の他, メンバー 1 名に対し, 1 名または 2 名のセラピスト (メイン・セラピスト, コ・セラピスト) であった。

4. グループセラピーの構造

X 年および X+1 年に, 隔週 60 分にてそれぞれ 14 回のセッションを行った。場所は大学院附属施設内プレイルームであった。刺激を排除するため, 遊具はすべて撤去し, その日のプログラムを記載したホワイトボードのみを設置した。

5. プログラム

1 回のセッションにつき, 2 ~ 3 つのプログラムを行った。1 つ目には緊張をほぐす事を狙いとするウォーミングアップを行い, その後, グループ内での相互交流に焦点を当てたプログラムを, リーダーおよびセラピストが企画した。後半のセッションでは, メンバーそれぞれと日程調整を行い, 全員がセッションの中で「クライアント企画」を行った。「クライアント企画」においては, はじめに企画を行うクライアントがプログラム案を考え, 案を元に担当セラピストおよびリーダーとの間で, セッション後の自由時間, または, 電話, FAX などを用いて協議を行った。

Ⅲ 事例の概要

1. クライアント: A, 初回面接時 (X-8 年) 小学校 3 年生, 男児。X 年時高校 2 年生。
2. 他機関診断名: 小学校 3 年生時にアスペルガー障害の診断を B 病院で受ける。
3. 成育歴: 同胞 1 人中第 1 子である。運動発達及び言語発達はとても早く, 幼児語を用いなかつ

た。また, ひらがなや漢字についても 1 歳で読み始めていた。幼いころから母親からみてどこか周囲と違うと思うところがあった。小学 1, 2 年の時にいじめを受けていた時期があったが, A は誰にも訴えなかった。小学 3 年生になって「2 階から飛び降りようとする」「自分を叩いたりする」といった行動が見られ, Y センターを受診。過剰な字義的理解, 会話時の必要以上の情報の付加, 形式張った口調など ASD 傾向が見られ, 自分から友人に声をかけられない, 興味のあるものを他者と共有しようとしなれないといった対人的相互作用における問題を指摘された。Y センターの紹介で医療機関に繋がり, Z 病院にてアスペルガー障害の診断を受けた。今後, 思春期に向けて集団生活での適応を高める必要があるとして, 筆者が所属する大学の相談機関を受診。その後, 個別面接とグループセラピーを並行して行っていた。中学までは学校への苦手意識が強かったものの, 高校へ進学すると「楽しい」と話すようになった。一方で, 勉強面も忙しく, 対人関係でも悩み, パニックになったり, 塾に行く振りをして行かないということがあった。

4. セラピーの経過: 個別面接では, 動作法面接を取り入れ, 身体感覚に着目する中で自己の緊張のコントロールを目指した。また, 同時に言語面接を行い, A の内面の言語化を促していた。その後, 個別面接は中断となった。また, グループにおいては, 発達障害傾向を有する小学生高学年から中学生を中心とするグループに所属していたが, X 年度より, 筆者がリーダーを行っている青年期のグループへ移動した。

5. 検査結果: 初回面接時 (9 歳) に行われた WISC-III では, 同年齢より高い知的水準であると考えられた (全検査 IQ132 言語理解 142 知覚統合 113 注意記憶 150 処理速度 100)。また, X 年 (17 歳) に測定した WAIS-III においても, 高い値を示した (全検査 IQ144 言語理解 150 知覚統合 130 作動記憶 150 処理速度 116)。

6. X年度における見立てと方針：ASDの特性から来る他者意図理解の難しさがあり、日常場面で他者とのコミュニケーションに苦手意識を持ち、自信の低下が見られていることから、安心できる環境の中で他者とのコミュニケーションを積み重ね、自信を持てるようになることが重要であると考えられ、グループセラピーの継続が望ましいと考えられた。また、ストレス対処も上手くいかない状況であることから、グループに居心地の良さを感じ、自分らしく振る舞いながらリラックスできることも狙いとした。

9. 倫理的配慮：保護者に研究の趣旨と個人情報の扱いについて説明の上、事例報告として発表することに同意を得た。事例の概要の記載については、事例の特定ができないように配慮した。

IV 事例の経過

X年度およびX+1年度のグループにおけるAの経過とAのクライアント企画について報告する。#は面接回数、「」はAの発言として表記している。

X年度における事例の経過

#1では、初めの自己紹介で「自分は、個性爆発しています」と話し、緊張した様子が窺えたが、他児もそれぞれ自己紹介をする中で、他児もそれぞれ個性的であるを感じとり、緊張がほぐれた様子であった。また、#2では、前回参加できていなかったメンバーが自己紹介を行い、「この前、自分のこと個性的なやつて言ったけど、上を越されました」と担当セラピストに話した。この終わりの時間には、他児と共通の趣味であるゲームの話で盛り上がる等、新しいグループになじめてきたようであった。#3では、Aが好むクイズを用いたプログラムであったため、正解にたどり着きたいという意識が強く見られ、次から次へと発言し、周囲はAの話す内容を理解できていなかった。そのため、他児はAの振る舞いに圧倒されていたが、Aはそんな他児の様子にあまり気づい

ていないように見えた。#5では、障害物を置いて、相手のボールの進路を妨害するプログラムを行ったが、障害物の置き方を微妙に変化させて調整することを楽しんでいる様子だった。プログラム後の感想でも「あれは考えました、考えましたねえ」と話し、頭を使って思考、推論する課題に対してAが熱中していた様子が窺えた。#9では、他児からアドバイスを受けるなど、一方的に自分が話すだけでなく、相互的にやり取りする機会が増えたように感じられた。夏休みには情報共有のために担当セラピストと保護者の間で面接の時間が設けられたが、その中では、小学生の頃から興味のあることは今とほとんど変わらないこと、そのため、昔から周囲と遊びの内容が合わなかったことが語られた。また、学校の休み時間は寝ていることが多く、友人との関わりは少ないとのことであった。#12では、ドッジボールを行ったが、Aのチームが観戦する番になった際、周囲が盛り上がっている中でもじっと戦況を見つめ、終始真剣な表情で観戦していた。

X年度におけるAのクライアント企画

Aの企画は#13を予定していたため、それに向けて担当セラピストおよびグループのリーダーと話し合いを行った。話し合いはプログラム後の自由時間や、セラピストとの電話で行った。初めAは、誰が嘘をついているかをフリートークの中で推理していくプログラムを提案したため、実際にAとセラピストとリーダーで行った。しかし、フリートークという構造は自発性が高く求められ、ほとんどのメンバーが何をすれば分からなくなることが予想された。従って、この構造の中では、Aが狙いとする「皆で推理を楽しむ」ことが難しくなると考えられた。そこで、リーダーとセラピストで検討し、このままでは、楽しめる人と楽しめない人が出てしまうかもしれないことをAに伝えた上で、質問カードを使って、カードを引いて質問できるようにしてはどうかと提案した。また、質問に対する回答に対しても、自由に回答す

Table 2. X年度におけるAのクライアント企画

タイトル	〇〇(グループ名)少数派はだれだ!?ゲーム
ねらい	読み合い(推理)を楽しんでほしい
ルール	<ul style="list-style-type: none"> ・あるテーマが全体に一つ提示され(例えば野菜), テーマに沿った単語が一人一つ配られる。 ・単語は2種類あり, 多数派と少数派に分かれる(例えばキャベツが4人, レタスが2人)が, 自分以外の人の単語や, 誰が少数派かは分からない。そのため皆で質問したり答えたりしながら, 自分も含めだれが少数派なのか推理し当てていく。 ・質問はだれでも自由に行える。司会(リーダー)が質問することもある。 ・質問したいけど内容が思いつかないときは質問BOXから一枚引いて質問することもできる。 ・話し合いの時間は2つに分け, 前半は自由に回答し, 後半は選択肢で答える。 ・選択肢は6段階で, 「いえす」「たぶんそう」「どっちも」「わかんない」「たぶんちがう」「ちがうかなー」である。 ・最後にそれぞれ少数派だと思ふ人を発表する。多数派が少数派を当てれば多数派の勝ち。当てられなかったら少数派の勝ち。

るのではなく, 選択肢を用意することを提案した。初めAはフリートークで進行したいと訴えたが, セラピストおよびリーダーとの話し合いの中で, 質問が思いつかない場合に質問カードを使うということでした。また, 選択肢については, 自由に答えても良いし, 選択肢を使っても良いという条件で提案を受け入れた。最終的なルールの内容をTable 2に示す。

当日は, ルール説明において「みなさん, 自分が常識だと思っていたことが実は常識でなかった。そういった経験はありませんか? このゲームはそういうことを・・・」と, ゲームの趣旨を皆に分かりやすく伝えようと工夫して話す様子が見られた。そして参加者側に戻ると「よっしゃ, やったるで」「楽しみー!」と話し, 素直に楽しもうとする姿勢が窺えた。テーマは『スポーツ』で, Aが口火を切って「そのスポーツをやったことがあるか」と全体に問いかけた。メンバーは担当のセラピストと話し合いながらそれぞれ答えていった。その後, メンバーからも『球は使うか], 『アウトドアなのか』と質問が出るようになり, 徐々に推理の手掛かりが増えていった。また, リーダーが全体に質問をするという場面で「みなさんリーダーさんは答えを知っているからこの質問もヒントになりますよ」と自らゲームの戦略を全体に向かって伝え, 周囲が楽しむことに気を配っているように感じられた。答え合わせでは, 一組が当てられるも一組は当てられず, 引き分けとなった。予想と

外れた場面でも, Aはいつものように激しく悔しがることはなく, 「なんだってー! ?」と驚きながらも楽しんでいるように感じられた。シェアリングでは, 「初期のころから, これだな! と思ったゲームだったんですけど, 難易度が高いのが問題ってなって, いろいろ話あって, まあ楽しんでもらえてよかったです」と話した。また, 「意外とみんなテニスやった事あるんですね」と話し, A自身も企画を通してメンバーに関心が向いていたようだった。

X+1年度におけるAの経過

X年時の終わりに, 来年度も継続の意向を確認したものの, その後, Aの保護者から連絡があり, 来年度は受験生でもあることから, グループを卒業して勉強を頑張りたいという本人の希望があり, グループは卒業ということになった。しかし, X+1年の夏休み明けに保護者から連絡があり, 筆者が再インタビューを行った。再インタビュー時の保護者面接では, 文化祭に関するやりとりでクラスメイトと上手くいかなかったことをきっかけとし, 親に内緒で学校を度々休んでいたことや, 家庭内の不和をきっかけにAがナイフを持って机の上に積んだ新聞紙を何度も刺すことがあったというエピソードが語られた。一方で学校に行きたくない理由についてははっきりと話せず, 「疲れた」「気力がわかない」と答えるとのことであった。保護者からは, Aの沈んでしまっている気持ちを持ちあげたいという希望が語られた。並行して

行った個別面接では、今回来談に至った経緯についてAに確認をしたが、曖昧な回答しか返ってこず、「こんなふうにつらいことを話すのがつらい。神経がすり減る」と話した。その後個別面接者との間でAがはまっているという『脱出ゲーム』について語り合ったところ、表情が生き生きとし始め、面接終了時には「こんなふう雑談できる」と満足そうであった。以上の内容を踏まえて、本人がつかく感じない程度に自分の悩みを言語化できる場として個別面接を再開するとともに、楽しくリラックスして過ごせる場を確保しつつ、その中で他者とのポジティブな体験の増加を狙いとしてグループセラピーを再開することをA及び保護者と確認した。

X+1年度の#11よりAは参加した。この回は風船バレーのプログラムであったが、Aはルールの穴を突こうと必死になっていた。また、自チームが優勢な状況では、試合終了の合図をリーダーが出す前に、A自らが出して試合を終わらせようとするなど、勝つことへのこだわりも高まっていたようだった。一方、この回の保護者面接では、グループへの参加を決めてからは調子がよく、気持ちも高揚していたという話が挙がった。#13では、昨年度とメンバーの変更がないこともあってか、グループに打ち解けてきた様子で、メンバーとのやり取りも増え、終始楽しそうに参加していた。X+1年度におけるAのクライアント企画

リーダーと担当セラピストで協議した結果、Aは年度の途中から参加ということもあり、また、受験生であることも踏まえ、クライアント企画は本人の希望があれば行うこととした。リーダーがAに確認すると、Aは「え、やっていいんですか」

と言い、強く希望した。そのため、Aと担当セラピストおよびリーダーで、企画についての話し合いを行った。Aは初め、自作の謎解きゲームをみんなに解いてもらいたいと話し、謎解きの問題を多数用意して披露してくれた。それらの問題は難易度が高く、回答できるメンバーが偏ってしまうことが懸念された。また、問題が難しすぎると、最後まで問題が行きつかない可能性があった。そこで、メンバーごとに謎を分担し、それぞれが解答したものを持ち寄ることを提案したが、A自身が過去に参加した脱出ゲームの形態と異なることから、Aはメンバー全員で問題を解く形を強く希望した。そこで、全体で問題を解く形は残すこととし、問題が書かれている5つのカードを部屋の中に隠し、それを最初に探すことから始めること（メンバーが活躍できる箇所を増やす狙い）と、謎解きの進捗を見て、ヒントを出すこと（難易度を調整する狙い）を担当セラピストとリーダーから提案した。「最初の脱出ゲームで失敗するっていうのもいい経験になると思うけど…」と後者については若干の抵抗を示したが、最終的には受け入れた。また、問題のなかに『リーダーの誕生日を入力する』というポイントを作り、さらにゲームの導入において『この後のプログラムで使う道具を置いてある部屋のカギを見つける』という設定をAが考案し、「このグループらしさが出た」と喜んだ。最終的なルールの内容をTable 3に示す。

初めの導入では、リーダーが依頼人として登場し、依頼人の頼みを引き受けるという形でAが導入を進めていった。そして、用意したBGMを流し、丁寧にルールの説明を行った。進行中はA

Table 3. X+1年度におけるAのクライアント企画

タイトル	〇〇(グループ名)探偵団
ねらい	メンバーで協力し、達成感を得る
ルール	<ul style="list-style-type: none"> ・部屋の中に様々な謎が書かれたカードが隠されており、メンバー全員でカードを見つける。 ・カードに書かれてある謎を解き明かすと、クロスワードが埋まり、新たな謎が現れる。 ・その謎を解くとさらに新たな謎が現れ、それを解くと箱にかけられているダイヤル錠のパスワードを入手できる。 ・ダイヤル錠が開くと次のプログラムのために必要な道具が入っている部屋の鍵を入手できる。

は時計をしきりに確認して「時間が」と焦っていたが、リーダーから時間については少し過ぎてしまっても問題ないことを伝えると、その後は焦りが和らいだようだった。Aは話し合いの輪に入りつつ、適宜ヒントを与える役割を取った。序盤の謎解きに時間がかかったものの、その後、次々に謎が解かれていき、メンバーが謎を解くたびに嬉しそうな表情を見せていた。シェアリングでは、Aが「結構前に謎解きの企画をしたことがあって、その時は全部先生に謎を任せましたですね。だけどそこから数年を経て、今回は自分で作りました。皆に楽しんでいただけたなら（よかった）と思います」と話した。後半のプログラムを担当したメンバーからは『自分のプログラムにつなげてくれて嬉しかった』と話があり、Aも「シナリオにはこだわった」と返した後、後半のプログラムについて「最後のあれはしびれた」と話し、お互いに称える様子が見られた。また、別のメンバーが『問題のクオリティが高い』と話すと、すかさず「ありがとうございます」と嬉しそうに答えた。Aは「ラストにいいものを作れてよかった」「本当に理想通りの展開」と話すなど、充実感が窺えた。

来年度については、他県の大学を受験予定ということもあり、このプログラムでAのセラピーは終結となった。

V 考察

1. 経過から見たAの認知特性

Aは幼少期より、他児と比べ知的能力が発達しており、物事の理解のスピードが速いという認知特性があった。その一方で他者の気持ちに注意が向きづらく、自分の話が周囲にどのように受け止められるかについて考えることは苦手であった。そのため、Aの理解に他者の理解が追いつかないこともしばしばあり、X年度の#3に見られるように、自分が思いついたことを次から次へと話していき、周囲が圧倒されることがあった。このような特性はAが好きな推理ゲームやパズルなど

の分野においてさらに顕著になり、結果としてAが好きなものほど、他者と共有しづらくなってしまっていると考えられた。日常生活の中でも、Aは学内で上手く友人関係を築くことができなかったが、その背景には、他者の気持ちに注意が向きづらい特性に加え、Aが他者と共有したいと考えるものが上手く共有出来ないという問題があったと考えられる。さらにAは、知能検査においては高い言語能力を発揮するものの、自身の気持ちや体験を他者に言語的に伝えることは苦手であった。X+1年時の再インタビューでも、悩みを上手く表現できておらず、Aにとっては、気持ちや感情のような曖昧なものは極めて捉えづらいものであると考えられた。このことと、Aが強く惹かれるものが推理やパズルであることは無関係ではなく、ただ一つの明解な回答が存在するものはAを安心させ楽しませる一方で、答えの定まらない曖昧なものはAにとってストレスフルに体験されることが多いのではないかと考えられた。物事の理解が著しく早い一方で、曖昧さを許容できないAの認知的特性は、他者とのコミュニケーションにおいてズレを引き起こし、Aの自信の低下につながっていたと考えられた。

2. Aにとっての「クライアント企画」

Aが日常的に好奇心を抱き、没頭していく対象は、推理ゲームやパズルであった。これは日常的にはAにとってのストレスコーピングの方略となるものであり、Aを支える強みとして機能していたが、1人でも没頭することが可能であるため、対人関係を発展させづらいのものであった。しかし、Aはクライアント企画を行うにあたって、X年及びX+1年の2度に渡って、推理を行うプログラムを企画した。そこには、自分が夢中になるゲームやパズルの面白さ、楽しさを、少しでも他者と共有したいという意識が表れている。Aは他者の気持ちに注意が向きづらいという特性はあるものの、決して他者に関心がないわけではなく、他者と物事を共有したい、人との関わりを大切に

したいという気持ちを持っていたと考えられる。Aのこうした気持ちを扱うために、筆者らがグループセラピーに取り入れた「クライアント企画」は有効であったと考えられるため、以下に考察する。

「クライアント企画」は企画の主体がクライアントにあり、クライアントが自由にこだわり、好きなように発想できる。しかし、それをグループの中で行うという現実的な側面についても考える必要があり、必然的に他者について意識を向けていく機会が生じてくる。実際、X年度においても、X+1年度においても、Aはセラピストとの協議の中で、どうすれば他者がプログラムを楽しめるか、他者と楽しみを共有できるかということに向き合っていた。そして、他者が楽しみやすいレベルについて想像し、自分自身の執着心を加減しながら、プログラムを作り上げていった。例えば、X年度においては、Aはフリートークを展開していくことに執着していた。しかし、実際にシミュレーションを行う中で、フリートークだけではメンバーと楽しさを共有できないかもしれないと考えるに至った。また、X+1年度では、自分が体験したことのあるゲームに近づけたいという思いが強かったものの、ゲームの難易度が適切か、メンバーそれぞれが楽しめるかという視点でプログラムを調整していった。その際には、『自分はこのプログラムを楽しめる』という自己の視点だけでなく、『これをメンバー全員で楽しむにはどのように工夫すればよいか』という他者の視点が必要になってくる。Aはメンバーのことを思い浮かべながら、他者の視点を取り入れ、自己の主張を調整していったと考えられる。「クライアント企画」の持つクライアントを主体に置く枠組みと、グループという構造によって、クライアントのこだわりを強みとして十分に引き出しつつ、他者視点の獲得を促すことが可能になった。このような展開は、Aの強みを最大限に活用できる「クライアント企画」ならではのものであり、仲間とともに企画を楽しめたという成功体験は、Aの自信に

もつながるものであったと考えられる。

以上のようなセラピーの展開の背景には、グループのメンバー間ですでに相互交流がある程度体験され、仲間意識が形成されていたことも大きく影響している。遠矢（2006）が述べているようにグループセラピーは「友人関係形成の場」でもあり、グループセラピーでのセッションの積み重ねの中でメンバーへの仲間意識が生まれていたからこそ、Aもメンバーへ意識を向けることが出来たと考えられる。従って、単にクライアントにプログラムを任せればよいということではなく、相互交流が促されるグループセラピーが十分展開された後に「クライアント企画」が行われることが望ましい。

3. ASD者の強みを活かした支援

「こだわり」という言葉はネガティブな意味合いを持つことも多い。しかし、彼らは、特定の分野においては人並み以上に探究心を持ち、その好奇心を深めていく。青年期になれば、活動範囲の拡大に伴い、その傾向はさらに顕著になっていくだろう。こうしたASD者の特性のポジティブな側面を支援者は十分に認識し、強みとして活用していく必要があるだろう。こだわりを強みと捉え、活用するという視点で考える際、その方向性は大きく2つに分けられる。1つは、こだわりそのものがASD者の生きがいや趣味、さらには職業となり、人生を豊かにするという視点である。本事例でも、推理ゲームなどがAの日常的なストレスコーピングの手段となっていたように、こだわりを追求することで、ASD者は安心感や満足感を得ることが出来る。また、田村・田辺（2009）は、「理解してくれる他者が周囲にいれば、青年期に至ると「こだわり」を趣味へと発展させていくことにつながっていく。さらには、専門的力量としての仕事上の技能へと発展可能になる」と述べている。このように、こだわりを活用することで就労へとつながる場合もある。もう1つは、こだわりを活用することで対人関係の発達へとつな

げるという視点である。今回報告した「クライアント企画」では、クライアントが日々好奇心を向け、没頭するような推理ゲーム等の対象を扱うことで、クライアントの主体性を引き出しつつ、グループの枠組みを活かして、自然と他者意識の形成へつなげることが出来た。辻井(1999)は、高機能広汎性発達障害者の内的世界(自閉的ファンタジー)について「内的世界を抱えられることで子どもたちは脅かされずに他者と関われるという体験をし、他者との関わりを楽しむ方向性へすすむことができる」としている。彼らのこだわりを大切に扱い、それを他者との関係性につなげることで、彼らの対人関係の発達を促すことが出来ると考えられる。

4. まとめと今後の課題

本事例では、ASD者のこだわりを活用するという視点と、そのための具体的なアプローチであるクライアント企画の意義について事例的視点から論じた。その結果、ASD者が普段没頭しているこだわり対象をグループの展開の中に取り入れ、活用することで、ASD者の他者意識の形成を促すことが可能になると考えられた。近年注目されているポジティブ心理学的な視点、強みを活用するという視点を発達障害者支援の枠組みのなかに取り入れ、その具体的なアプローチを提案している点で、本研究には意義があると考えられる。

最後に本研究の限界について述べる。本研究は事例報告であり、客観的な視点が不十分である。ASD者の強みを活かそうとする試みは幾つか報告されるようになってきているものの(例えば真角・針塚, 2014, ポーター, 2011), 調査研究についてはほとんど見られないことから、今後は、より実証的な知見についても積み重ねていく必要があるだろう。また、グループセラピー以外の場面での強みの活用についても、さらに検討していく必要があると考えられる。

付記

本論文の作成にあたり貴重なご示唆をいただきました黒木俊秀教授に感謝を申し上げます。そして、セラピーを通して私に数多くの学びを与えてくれたAとその家族に感謝いたします。

文献

- 別府哲(2010). 高等学校での支援の実際. 別府哲・小島道生(編). 「自尊心」を大切にしたい高機能自閉症の理解と支援 有斐閣選書, pp192-218.
- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders (5th ed.)*. Washington, DC: American Psychiatric Association. (アメリカ精神医学会)
- 高橋三郎・大野裕(監訳)(2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- 廣澤満之(2016). 青年期の発達障害者を対象とした心理臨床グループにおける相互性の体験の意義 白梅学園大学・短期大学紀要, 52, 21-36.
- McCoach, D. B., Kehle, T. J., Bray, M. A. & Siegle, D. (2001) Best practices in the identification of gifted students with learning disabilities. *Psychology in the Schools*, 38 (5), 403-411.
- 真角宏子・針塚進(2014). こだわり対象を利用した自閉症児との遊びにおける関係性と行動の変化: つぶやき語による積極的な働きかけを用いて 心理臨床学研究, 32 (2), 227-237.
- 松村暢隆(2016). アメリカの2E 教育の新たな枠組—隠された才能・障害ニーズの識別と支援— 関西大学文学論集, 66 (3), 143-171.
- 西田充潔(2014). 高機能広汎性発達障害児の思春期・青年期における「自己意識」の発達—顕在的セルフアウェアネスの発達段階に着目した文献的検討— 北星学園大学社会福祉学部北星論集, 51, 141-149.
- ポーター倫子(2011). 高機能自閉症児のこだわりを生かす保育実践—プロジェクト・アプロ

- チを手がかりに 保育学研究, 49 (1), 73-84.
- 滝吉美知香・田中真理 (2011). 思春期・青年期の広汎性発達障害者における自己理解 発達心理学研究, 22 (3), 215-227.
- 田村浩子・田辺正友 (2009). 高機能自閉症者の発達と教育・発達支援—K君との出会いから大学卒業・就職までの20年間 教育実践総合センター研究紀要, 18, 1-7.
- 遠矢浩一 (2006). グループセラピーの理論的背景 針塚進 (監)・遠矢浩一 (編). 軽度発達障害児のためのグループセラピー ナカニシヤ出版, PP1-16.
- 辻井正次 (1999). 複合的大グループでの治療教育例 杉山登志郎・辻井正次 (編). 高機能広汎性発達障害—アスペルガー症候群と高機能自閉症 ブレーン出版, PP239-245.

The idea of development of group therapy that takes advantage of the strengths of ASD people - Case of high school boy who formed consciousness of others through "client's project"

Haruki KOCHO

Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

Kosiro SHIMOIKE

Social welfare corporation, genyokai center for child development, kasuya

Satoshi KOGA, Koichi TOYA

Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

In this study, we'd like to report on the development of 2-year-group therapy for a high school boy who has had a tendency of autistic spectrum disorder (ASD). The high school boy had a problem of interpersonal communication peculiar to ASD, and had a difficulty in making good relationship with others in his school life. Also, in the group activities, he was far too immersed in his favorite activities that he paid little attention to other members. In a group therapy, he made up a "client's project" in which he himself organized a session and positively utilized his persistence to his favorite activities. In the process of devising the program, he discussed with the therapist in charge and the leaders what kind of ideas would be required for other members to enjoy the activity as well. In the discussion, he reviewed his program so that every member can enjoy it as well as him and made some adjustments to the content of the program. In conclusion, it would be possible to promote ASD people's awareness of others by understanding their persistence to the objects, which can be their strength, and utilizing it positively.

Keywords: group therapy, strength use, client's project